

郷土博物館・文学館だより

第15回 渋谷現代短歌募集 優秀作・佳作発表

渋谷には、明治時代から現在に至るまで、多くの文学者が住み、近代短歌の発展に貢献してきた雑誌『明星』や『アララギ』も渋谷で発行されました。当館では、こうした渋谷の文学風土を継承し、区民をはじめ多くの方々に渋谷を再発見していただく機会として、年に一度、「渋谷」を題材にした短歌を募集しています。

15回目を迎えた平成26年度は、41名から151首が寄せられました。この中から優秀作5首、佳作5首が選ばれ、作品を書写した色紙は、当館と渋谷区役所中央エレベータ前ホールに展示されました。

5月13日には当館で表彰式が行われました。表彰者の中には、当館主催の文学講座「短歌をつくろう」で経験を積んで挑戦した結果、

受賞に至った方もいらっしゃいました。

平成27年度も10月から短歌の実作を中心とした講座を開講します。より多くの方の講座参加と「第16回渋谷現代短歌募集」への応募を期待しています。



表彰式に出席された入選者の皆さん

第十五回渋谷現代短歌く優秀作・佳作く

元聖徳大学教授 逸見久美選

〔優秀作〕

石積みこのうほね川の岸のあと

路地うらの道に静かに残り (系井修三)

父と僕ぬいぐるみ買ったおもちや屋は

道玄坂のどこかにあった (大庭成喜)

黄金のカケラ散らしていちよう散る

渋谷の街に木枯らしの吹く (北村早苗)

暮れ刻のハチ公広場さざめくも

喫煙ボックスみな寡黙なり (黒川京子)

うすら氷のはりたる池に鯉一つ

赤く動かず時止まる昼 (水野静子)

〔佳作〕

老いじたくなどはいらぬ家族住む

渋谷である日すつといきたい (池谷隆徳)

日脚さす二・二六事件慰霊像

今年も咲ける純白の梅 (大熊順三)

新しきケースに並ぶ埴輪たち

若木が丘の昔をおもう (大塚洋子)

あのバスもこのバスもまた渋谷行き

全ての道は渋谷へ通ず (金子佐知子)

外苑は明治天皇を慕いたる

民の寄付金献木にて成る (寺内佳子)

戦後70年 戦争と区民の生活

太平洋戦争が終結して今年ちょうど70年、節目の年になります。戦争を体験した人たちの多くは70～90代となり、その体験や記憶を語り継ぐことがますます難しくなってきました。

今から約100年前の明治42年(1909)、現在の都立代々木公園のところに代々木練兵場が開設されました。これは当時の東京の中心部が都市化によって手狭になり、軍用施設が周辺部に移転されたためです。その後も恵比寿の海軍技術研究所をはじめ、渋谷をはじめとする山の手周辺には軍用関連施設が開設されました。

昭和7年(1932)、渋谷町・千駄ヶ谷町・代々幡町の三町により渋谷区は誕生しますが、ちょうどその頃、渋谷駅はターミナル化が進んでいました。昭和9年には東京で最初の私鉄ターミナルデパート「東横百貨店」も開業しました。これに伴い道玄坂一帯は、商店街や映画館など盛り場として栄えるようになりました。

一方、昭和6年満州事変、昭和12年日中戦争、昭和16年の太平洋戦争勃発と戦争が長期化し、国の施策は軍需優先へと変わっていました。こうした中、昭和13年の「国家総動員法」をはじめとする戦時法令は、さまざまな産業の生産や販売、流通などを大きく制限するものでした。

世の中の物資は次第に不足し、庶民は自由にものが買えなくなるという深刻な事態となりました。昭和15年には砂糖やマッチの切符制が始まり、翌年4月には「生活必需物資統制令」の公布、6月からは「米穀配給通帳制」、「外食券制」が始まりました。やがて衣類や味噌醤油

にいたるまでが切符制になりました。「ぜいたくは敵だ!」「ほしがりません勝つまでは」などの標語も生まれました。

町会組織も国家総動員体制の中に組み入れられ、「隣組」も結成されました。戦局が悪化してくると、防空壕掘りや火災消火のためのバケツリレーの練習などが隣組が中心に行われるようになりました。また渋谷駅周辺では延焼を防ぐために建物の強制疎開も実施されました。

戦争は教育制度にも影響を与えました。それまでの尋常小学校・高等小学校が八年制の国民学校に変わり、空襲が激しくなると学童疎開も開始されました。昭和19年には渋谷でも静岡県や富山県方面に学童疎開が実施され、親元を離れた子どもたちの集団生活が始まりました。

昭和20年5月24日と25日、渋谷区をはじめとする山の手を大空襲が襲いました。渋谷区の約77%が焼け、死者は900名を数えました。さらに多くの人びとが家族や仲間を戦地や空襲で失い、日常生活は困窮を強いられるなか、原子爆弾が広島と長崎に投下されます。

8月15日、ついに日本はポツダム宣言を受諾、長く続いた戦争は終わりました。



戦災直後の笹塚付近

加藤周一と「桜横町」

平成 20 年 (2008) に 89 歳で亡くなった加藤周一は、生まれてから青年期までを渋谷で過ごした評論家です。大正 8 年 (1919) に渋谷町大字青山南町七丁目に生まれた加藤は、15 年、開校したばかりの渋谷町立常磐松尋常小学校 (現在の渋谷区立常磐松小学校) に入学します。そして、府立第一中学校・第一高等学校を経て、昭和 15 年 (1940) に東京帝国大学の医学部に入学し、血液学を専攻します。

大学在学中の加藤は仏文科の講義にも出席し、中村真一郎・福永武彦らと作品朗読会を開くなど、文学活動にも力を入れます。卒業後は医師として勤務する一方で、終戦後の 22 年に中村・福永と共著で『1946 文学的考察』を刊行し、文壇の注目を集めました。翌年には中村らと『方舟』を創刊し、以後、評論そして小説家としても旺盛な創作活動を行います。33 年に医業を辞めてからは、評論家として独立し、一方で 45 年にベルリン自由大学教授となったほか、プリティッシュ・コロンビア大学やイエール大学などでも教鞭をとっています。

43 年に刊行された自伝的作品『羊の歌』には、小学校時代を過ごした渋谷の住宅街の様子が、彼の透徹した視点によって描かれています。「桜横町」からその一部をみてみましょう。

八幡宮から学校までの道には、両側に桜が植えられていた。その桜は、老木で、春には素晴らしい花をつけた。桜横町とよばれたその道には、住宅の間にまじって、いく

つかの商店もあり、そこで子供たちは、鉛筆や雑記帳を買い、学校の早く終わった時には、戯れながら暇をつぶしていた。からたちの空地のように町から離れてもいず、八幡宮の境内のように男の子だけの遊び場でもなく、桜横町には、男の子も、女の子も、文房具屋のおかみさんも、自転車で通るそば屋の小僧も、郵便配達もいたのである。学校に近かったから、道玄坂などとはちがって、半ば校庭の延長のようでもあり、しかも校庭とはちがって、街の生活ともつながっていた。私は二つの世界が交わり、子供と大人が同居し、未知なるものが身近なるものに適度の刺戟をあたえるその桜横町のひとときを好んでいた。

加藤の家は金王町そして美竹町へと移りますが、一高の寮生活時代を除き、22 歳に世田谷に転居するまで、加藤は渋谷で過ごしました。『羊の歌』の随所から、渋谷での生活環境が彼の創作活動の原点であったことがうかがえます。



現在の「桜横町」

文化財紹介

国指定重要文化財

「明治神宮 宝物殿」

十三棟（大正十年）

（平成23年6月20日 指定）

所在地 代々木神園町1-1



（明治神宮 宝物殿）

明治神宮宝物殿は、明治天皇・昭憲皇太后を祀る明治神宮境内の北方西寄りに位置しています。日本における初期の鉄筋コンクリート建築の代表的な建物です。外観的な特徴としては、奈良に所在する東大寺正倉院の校倉造りの様式を模している点にあります。

明治神宮は、内務省に設置された明治神宮造営局によって、大正四年（1915）から九年にかけて造営されました。宝物殿は、同局の技師大江新太郎の設計を長崎橋本組が施工して、大正十年十月末に竣工させた、不燃構造による和風表現の最初期の例となります。

特に明治天皇ゆかりの御物などを陳列する中心的施設である中倉の内部は、単層で高床を用いた展示施設となっています。同局の技師志知勇次の構造設計により、梁間十五メートル、桁行三十メートルの大空間を実現し、それらをピロティ

杭）で持ち上げるといふ、当時の技術レベルにおいては、群を抜く大胆な構造を採用しています。

この中倉を中心に東西廊と東西橋廊が付随し、中倉を含めて十三棟の建造物が宝物殿を構成していますが、その全ての建物が重要文化財に指定されています。

また、大江の意匠を、当時の日本において導入されて間もない鉄筋コンクリート造を基に形をなしたことは、この建物の評価を高めている大きな要因となっています。

東日本大震災においても、この躯体の耐久性は、証明されました。

このように、近代の建築史に足跡を残すほどの和風建築の存在は、技術史上においても、渋谷区にとっても重要で、高い価値を有するものと思われま

【今後の展示予定】

◆企画展「戦時中の渋谷-資料が語る当時の暮らし-」

平成27年8月8日（土）～10月12日（祝）

戦後70年にあたり、戦時下の渋谷の暮らしを振り返ります。

◆特別展「杉浦非水・翠子展」展（仮）

平成27年10月24日（土）～平成28年1月10日（日）

商業デザインのパイオニア・非水と歌人・翠子。渋谷に暮らした芸術家夫婦の作品を紹介します。

◆企画展「描かれた渋谷」展（仮）

平成27年1月19日（火）～平成28年3月27日（日）

絵画から渋谷を読み解きます。

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆11:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※1日以内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.29

平成27年8月10日発行